革命

25号　2頁　20円
毎月1日・15日発行
発行所
東京都豊島区西池袋3-4-2
現代社
電話　東京(983)3429
振替口座東京—142518
編集発行人　田中五郎
購読料
6ヶ月12回送料共300円

# 21全国ゼネスト の波及をもって安田講堂奪還・全学バリケード斗争を斗いぬけ！

## 秩序回復の為の入試強行声明と一・一五本郷の闘う団結による制圧なる！——

日本資本主義の社会秩序の帝国主義的確立の運動は、その教育過程において学生の皿みなどの抵抗をうけている。

早大学費・学館闘争に端を発した六年以降の産学協同路線への闘争は、二年余の全国的拡大と質的深化のなかで、決定的時点に到っている。

すでに「事実」となっている留年の上に、入試中止という事態を直前にして、ブルジョアジーは、「決断」したのである。

11・22闘争以降、不十分ながらも開始された東大闘争をめぐっての全国教育闘争の結合と、東大全学共闘会議の闘いの深化の前に、手づまり状況にあった当局は、もはや中間的態度をとりきれずに、一挙に右翼的方針を利用しつつ、入試強行へふみきったのである。

それは、「社会の平穏」（それは、教育過程における闘争ドレイ化と、職場におけるプロレタリアートのドレイ状況を前提とした）をねがう秩序派の「大衆的」な支持と、「強大な権力への服従」というファシズム的構造のなかで行われようとしている。

顕在的には、三井三池闘争において闘われ、更に第三次合理化の進行の中で、東交、全学、国鉄等によって進められた反合理化闘争の波が、合理化に見合った教育過程の再編の闘いと結合しようとしている。

この闘いは、日本資本主義の存立基盤を、本当の意味でゆるがす力となってきている。

この闘いに対する弾圧は、すでにファシズム的構造をもってしかない。こういう状況の中で全学共闘会議のよびかけにこたえて、九州大学文学部の運帯ストライキ等を背景に二万名に近い学生と、数千名の労働者が、安田講堂前に結集した。

当局と権力は、機動隊数千名により、東大を包囲し、すでに中間派としての態度をとりきれなくなった日共民青は、秩序派と連合しつつ、「武力」によるスト解除をエスカレートしようとしていた。

まず、我々は、このような国家権力と、それに屈服する形で自己保存をはかろうとしている日共・民青の策動を完破し、闘いの象徴となっている安田講堂の前において力強い労学集会が獲得され、本郷を教育・医の一部を除いてほぼ完全に制圧したことを我々の勝利として確認しておかねばならぬ。これをもって、「教育闘争」の「階級運動」への発展が獲得されたのである。

また、同時に、東大駒場において、本郷に呼応して闘わんとした駒場の学友に対して、日共・民青の気狂いじみた破壊活動とテロが行われたが、頑強な抵抗をもって今もなお対峡しつづけていることを全国の学友に訴えておかねばならない

我々はまず、現局面の理解を、また自分達が闘っている意味をしっかりと知っておかねばならない。

一人一人の学生は、直接的には、医学部処分問題にみられるような学生に対する「侮辱」「非人間的取扱い」を契機として立ち上がった。

それは、同時に共に、その当局の態度の中に、現在の教育制度の中で、ますます専門化され、その専門的精神労働の中に自己の存在をスリ滅ぼされ、同時に一人一人の運命は、「大海の砂粒」のようにしか扱われない「自分の問題」をみたのである。

このような問題に端を発し、その闘いの中で、自己の矛盾の根源を教育制度そのものの中に発見して闘いに立ち上がった学生は、その「反逆」の中で、すでに決して「専門奴隷」の中にもどる事の出来ぬ「存在の全面的発展と、競争をこえた相互の結合」を開始したしかも、それは、教育の改編の原因となっている合理化問題を意識化し、反合理化闘争を闘い、その中での開始されている新たな共同体的団結との結合を開始したのである。

諸個別的な教育闘争の結合と、更にそのプロレタリア運動との結合——教育闘争の階級的政治的発展は、資本主義社会の存立基礎をゆるがすものなのである。

当面、東大の一点から吹き上げる火柱は、全国的教育闘争の波の全面的展開を推進している。

そしてブルジョアジーは、この闘いの質からいってすでに、自らの存立をかけて、反差別、反合理化の闘いの圧殺のために、社会の「秩序派」の「担手」の下に、強力な、暴力的圧殺を準備し、その実現の秒よみの段階に入った。

勿論、この闘いは、我々によって主体的に提起されたものであるが、秩序回復のための入試強行声明が、一・一五を中心とする局面の中で行われた事は、偶然ではない。

一・一五闘争は、日本階級闘争史上、初めて、労働意識へ対決しているプロレタリアートが、その労働監獄の推進としてある教育の帝国主義的再編—産学協同路線—を実践的に問題とし、自ら闘ったのである。

プロレタリアートと学生の闘いは「政治運動」に於ては、しばしば存在したが、社会運動に於て実現されたのははじめてである。これは、日本ブルジョアジーを決定的にゆるがして行く階級運動の巨大な契機となった。この力こそ、七十年安保を闘いぬくものである。

アジア・太平洋経済圏といわれるひろがりの中で真徴されようとしている産業合理化は、新たなる機械体系の導入のもとに、「専門性のないという専門ドレイ」単純肉体労働」の深化と強化を生み出し、プロレタリアートの貧困への絶望的従属を生み出している。それへの闘いは、一つ一つの攻撃を突破するものと同時に、プロレタリアートが政治的支配能力を獲得してゆく基礎が形成されている。

生きた諸個人の全面的発展のための団結とそれを通しての自立が進んでいる。

学生は、疎外された精神労働に自己の全存在を手段化されてゆくことへの反逆を通して、このプロレタリア的団結への結合を築こうとしている。たしかに、一・一五闘争は、権力の全面的介入の危険の中で、不十分な形でしか実現できなかった。しかし、反合理化闘争を闘っている労働者と、産学協同路線への闘いを進めている労働者が、今までの政治運動の次元を一歩こえて共同闘争を行なったと

## 東大斗争——全国教育斗争の展望は何か？

——一・二一ゼネスト・全学バリケード貫徹！——

十一・三闘争以後、東大闘争は、現象的にみれば「手づまり状況」には入っていたようにみえた。しかし、それは、一・一五により切りひらかれつつあるものの準備の期間である。全学共闘会議の中の諸潮流はわれわれをのぞいて局面の打開の真の力と、思想性を欠いている。「東大闘争は敗北した事を前提として考えて行かねばならない」（文学部の革マルTの言葉）という基マル派の日和見主義を右の極としつつ、その他の潮流も、諸々の物理的対応以上に、展望をもっていない。東大闘争の基本軸を産学協同路線粉砕闘争としておき、その中でプロレタリア人民との結合を推進する事は、単なるイデオロギー的次元の問題でもないし、また、物理力の予定を補うためのものでもなく、プロレタリア運動に「下駄をあづける」ためのものでもない。十一・二三により開始されたものは、単に対民青のゲバルト的団結によりまらず東大闘争自身が質的深化をとげつつそれをテコとして諸教育闘争が、相互の闘争の中に、自らと同質のものを発見し、意識化し、相互に協同の活動を行う中で結合してゆくものであり、その軸は、当面の教育の状勢と社会秩序の改編の問題を抜きにしては、どこにも成立しないのである。闘争の決定的局面を前にして、今全東大の学生は、もう一度、自分のエネルギーの点検と、再武装化に入っている。

その鍵は、今闘いの中で自分が到達している地点が、現下の帝国主義的活動とどのような関連において成立しているのかを、全国的に整理し、それを、労働監獄の矛盾と結びつけてゆく事である。

「反逆」とその中での全面的発達への欲求（それは、場合によっては今迄自分が行っていた学問への新しい興味というような形でさへ発現する）は、あともどりさせてはならぬし、その闘いが、さらに原因（合理化）へ迫るものとして準備されねばならぬ。早大闘争以降「産学協同路線」という問題は、自己の反逆の肉をしって行くというめんが軸となっていた。現下の闘いは、その上に立ってさらにその具体的上揚へ、実践的に進む段階へとまっている。

それは、自からの闘争の質的変革的深化の中で封鎖を拡へた全国の諸闘争が相互の闘いの結合、プロレタリア運動との結合となしつつ、次の闘いへ頑強に推進しつづける事である。七項目貫徹—全学バリケード封鎖—これを通しての単一青医連の団交権を通した医闘争反産協闘争の前進を勝ち取る事。一・一五に於て東大闘争はそれ自身として強力な質的発展をとげたのである。

学生運動は、それぞれの闘いにおいて質的深化をとげその激化の中で自己の矛盾の根源（合理化）に於る闘いと結合しつつある。全国的に連帯し、如何なる破壊にも屈しない団結により、くり返し、その個別的な闘いの勝利を追及しなければならない。その個別的闘争の極限追求は、普遍化されて全国的結合の強化へと発展させられねばならない。その力は、一歩一歩、政治的頂点への闘いとして準備されなければならない。

当面の問題として、具体的に語るならば、全学バリケードに封鎖の貫徹と全国ゼネストの追求である。権力、民青との対決に於ける実力闘争の貫徹に於ても、この権造に従ってなされねばならない。

この闘争の権造を貫徹するために次の組織的準備がなされなければならない。

（第一）全国学園に於ては自己の学園に於る闘いを東大闘争との結合をはかりつつ直接的に東大闘争連帯ゼネストを追求する事。

（第二）労学共闘を更に推進し可能な所から東大闘争の連帯支持委員会（仮称）を形成して行く事。地方に於ても可能な限り集会を行い組織化を行って行く事。

（第三）七項目要求貫徹、全学バリケード封鎖を追求して貫徹する事。

〈第四〉東大に於る組織化の問題であるが緊急に要請されているのは最前線に立って実力闘争を貫徹している活動家の質量共に強化を全力で行うことである。

そして、更に、この部隊を支持しつつある広汎な層としての実力部隊との結合を、方針、思想の双方に於て実現する事。

そのテコとなるのは、各学部ストライキ実行委員会の再強化であり、そしてこのストライキ実行委の強化により、その連合としての全学共闘会議の強化、発展を行う事である。

要点は、実力闘争を頂点とし、それへおし上げながら同時に、あらゆる層に於て、各人がなしうる方針を与えて行く事により、強力且つ広大な戦列を更に構築する事である。

反帝学生評議会はその中心点。推進者とならねばならない。

以上の構造をふまえつつ当面の方針は、全学の封鎖の拡大と、一・二一、全国ゼネストをもっての全学バリケード封鎖の貫徹である。

## 斗争の反革命的固定化に狂奔する日共・民青を粉砕せよ!!

この東大闘争は、日共、民青の本質を更に鮮明にした。

既にのべられたリンチのみならず、この決戦時において、日共、民青は、全面的に右翼秩序派と連合し、闘争の収拾策動にのっている。

我々は、この日共・民青の活動を本当に粉砕して行くために、彼等の活動が、どこにその根拠と本質をおいているのかをしっかりと知っておかねばならない。それは同時に、自分の闘いを本当に推進して行く力となるのである。

勿論、たとえそれが闘う部隊にひきずられた結果であったにせよ一応彼等は、ストライキには賛成してきた。しかし、彼等は「全学バリケード封鎖」については頑強な抵抗をしてきた。もとよりこの形態の問題にこだわって問題を理解してはならないが、当面そこに一つの鍵がある。

即ち、彼等にとって教育の場はそこから「抗議」することはして良い場ではあっても、決してそれを超えた力によって制圧されてはならぬ場なのである。そして、この「一線」を守るためには、「実力」をもって闘うのである。そこには一つの「守るべき世界」があるのである。

それは、「労働者の職場における反革命的固定化の狂獣状態の上」に成立ってしまっており、そこにおける疎外の苦しみを部分的に修正し、「孤立」にかわる「共同体」を作ろうとしているのである。そのエネルギーは、教育の場における矛盾を、本質にかえすことなく、その疎外の中の「孤独」を「補う」共同体を形成し、その防衛のためには「実力」で抵抗するのである。それは実は、日共の二段階革命——当面の運動においてプロレタリア運動に可撰されていなければならないとする——の学生運動版の結果である。この戦略が現時点において

## 小市民的諸派の限界を突破して前進せよ!!

諸潮流の基礎を鮮明にしてゆく。七〇年安保闘争の開始の年における東大闘争は、諸潮流の戦略的内容をうきぼりにしている。しかも、この東大闘争における如く局面の緊迫している中では、その破産もまた一層鮮明になって行くのである。

闘争の決戦時において最初に脱落したのは革マル派である。彼等は一月九日、十日、十一日という局面で、全学の闘争に、「主体的」にかかわっていなかった事を暴露した。

九日の夜、われわれと中核派の間—これは現象的にはわずかだが翌日以降の闘いにみられたような差異を胎んでいた—をブレ、あげくの果てに、中途半端な対応しかなしえず、官憲の導入以後全く方針を失ってしまった。

十日という日には、全く何もせず「拠点」攻撃部が民青に攻められ

（次頁につづく）

## 万国の労働者団結せよ

日本社会主義青年同盟
学生班協議会解放派

れ陥落するのを見殺しにしたわけである。これは云うまでもなく、今回の闘争を「国大協の自治規制反対闘争」としていることの結果である。彼等にとっては、云わば何故闘争がここまで深刻化するのかわからないのである。「産学協同路線ではなく、産学協同政策である」などと云うのは、プロレタリアート中学生の社会的隷属に全く目をそむけてしまう結果なのである。

（もち論学生と労働者の隷属の植造は異る）せいぜい彼等の頭に浮ぶのは、「何とか闘争が文学部の革マル派のヘゲモニーが残ったまま終ってほしい」という事位である。彼等にとっては、現実の諸矛盾への闘いなどどうでもよい事であり、まして、やはりこの闘いの中で如何に新たなものが生まれてくるかなどというのはわからない。全国の戦闘的学生と文学部の闘う学生によって維持されているものは官僚的収拾しか頭にうかばないのである。この彼等の全く官僚的な反スタイルというスターニニズムの運動は、早大交連の乗取り策動の別の側面であり徹底して暴露し、粉砕して行かねばならぬ。闘いを放棄して日陰にはびころうとする害虫を、白日の下に暴露し粉砕せねばならぬ。

現実の諸矛盾への闘いの中に本当に資本をこえ、従って又、日共をこえて行くものをみる事の出来ない結果、単なるイデオロギー的乗りこえに終る（要するに夢想に終る）革マル派の、逆が、中核派である。

彼等は、その現実への急進性に於て、革マル派と区別されねばならぬが、闘いを非常に表面的な所にしかとらえていない。従って、局面の打開は、単純な戦術のエスカレート以上に思いつかず、それが失敗すると消耗する訳である。

彼等の「東京帝国主義大学打倒」なるものは、精神労働・肉体労働の問題を扱って、我々をひきちぎつしようとしているが、それを資本の運動（分業と競争）を通じて展開していないため、文字通り一般的に「帝国主義大学の打倒」を語るにすぎなくなる。当面、これに非常に近いのがML派である。

ブンドの場合は、我々に近いような言葉を使いつつも、結局敗治主義的な形でしか問題を立てられないのは、中核派と同様、分業と労働過程を把握していない結果なのである。従って戦術的にも、非常に中核に近い形となってくる。

いづれの場合も、日共＝岡青の止揚の問題は、「反帝反スタ」的又は、単純物理主義的にしか定立されない。我々はこれらの根底的止揚をなしつつ、新たに、第三次合理化の進展に見合って進行しつつある。教育の帝国主義的改編の動向（大学院大学構想、大管法等々）に真向から対決する教育闘争を構築していかねばならない。

街頭への、物理力としての大衆の獲得のための教育闘争を越えて構造的不況の下で着実に深化しつつある、学生の社会的隷属を越えていく闘う団結の発展、諸個人の自立のための闘いとして教育闘争の大衆的爆発を獲ち取っていかねばならない。

この社会的権力との対決の中から生み出される闘う団結を発射点として、政治的頂点に対する闘いのプロレタリア的深化を獲得していくことが、日本学生運動の今日的課題である。

反戦、反合を基調とした労学の闘う連帯の中からプロレタリア統一戦線の深化を獲得していくことを通して、七〇年代の日本階級闘争の権力に迫る闘いの勝利の展望が切り開かれるのである。

# 官憲を圧倒的に紛砕

## 二日間、安田講堂死守

大学当局と日共＝右派連合による「封鎖解除＝スト収拾」策動を粉砕し、全国学園闘争勝利に向けての反産協の闘いを十三日、十四日、本郷、駒場において、しつよう に展開した反帝学評を中心とする戦闘的学生は、東大闘争をまさしく反産協の闘いとして突き出すものとして、反合闘争を闘いぬいている青年労働者との結合の実現を勝ちとるため十五日「東大闘争勝利労学総決起集会」を前日の安田講堂をはじめとした二千数ケ所の再封鎖闘争を背景に、四千の規模で圧倒的に闘い取った。

このような、東大闘争の反産協闘争としての深化は、資本制教育の根底としてあるが故に、大学当局は、我々の闘いの、暴力的圧殺の〝最終的決着〟へと自己を厳りたてざるをえない。

十七日、加藤代行は、官憲の手による〝武装解除〟の方針を打ち出し、「スト収拾＝入試強行」を通じて、東大闘争を資本制教育秩序のもとへ再度吸収し封じこめるための、最終的ケリをつけたわけである。

大学当局と日共＝右派連合による「封鎖解除＝スト収拾」策動を粉砕し、全国学園闘争勝利に向けての反産協の闘いを十三日、十四日、本郷、駒場において、しつよ に展開した反帝学評を中心とする戦闘的学生は、東大闘争をまさしく反産協の闘いとして突き出すものとして、反合闘争を闘いぬいている青年労働者との結合の実現を勝ちとるため十五日「東大闘争勝利労学総決起集会」を前日の安田講堂をはじめとした二千数ケ所の再封鎖闘争を背景に、四千の規模で圧倒的に闘い取った。

このような、東大闘争の反産協闘争としての深化は、資本制教育の根底としてあるが故に、大学当局は、我々の闘いの、暴力的圧殺の〝最終的決着〟へと自己を厳りたてざるをえない。

十七日、加藤代行は、官憲の手による〝武装解除〟の方針を打ち出し、「スト収拾＝入試強行」を通じて、東大闘争を資本制教育秩序のもとへ再度吸収し封じこめるための、最終的ケリをつけたわけである。

現実の諸矛盾への闘いの中に本当に資本をこえ、従って又、日共をこえて行くものをみる事の出来ない結果、単なるイデオロギー的乗りこえに終る（要するに夢想に終る）革マル派の、逆が、中核派である。

彼等は、その現実への急進性に於て、革マル派と区別されねばならぬが、闘いを非常に表面的な所にしかとらえていない。従って、局面の打開は、単純な戦術のエスカレート以上に思いつかず、それが失敗すると消耗する訳である。

彼等の「東京帝国主義大学打倒」なるものは、精神労働・肉体労働の問題を扱って、我々をひきちぎつしようとしているが、それを資本の運動（分業と競争）を通じて展開していないため、文字通り一般的に「帝国主義大学の打倒」を語るにすぎなくなる。当面、これに非常に近いのがML派である。

ブンドの場合は、我々に近いような言葉を使いつつも、結局敗治主義的な形でしか問題を立てられないのは、中核派と同様、分業と労働過程を把握していない結果なのである。従って戦術的にも、非常に中核に近い形となってくる。

いづれの場合も、日共＝岡青の止揚の問題は、「反帝反スタ」的又は、単純物理主義的にしか定立されない。我々はこれらの根底的止揚をなしつつ、新たに、第三次合理化の進展に見合って進行しつつある。教育の帝国主義的改編の動向（大学院大学構想、大管法等々）に真向から対決する教育闘争を構築していかねばならない。

街頭への、物理力としての大衆の獲得のための教育闘争を越えて構造的不況の下で着実に深化しつつある、学生の社会的隷属を越えていく闘う団結の発展、諸個人の自立のための闘いとして教育闘争の大衆的爆発を獲ち取っていかねばならない。

この社会的権力との対決の中から生み出される闘う団結を発射点として、政治的頂点に対する闘いのプロレタリア的深化を獲得していくことが、日本学生運動の今日的課題である。

反戦、反合を基調とした労学の闘う連帯の中からプロレタリア統一戦線の深化を獲得していくことを通して、七〇年代の日本階級闘争の権力に迫る闘いの勝利の展望が切り開かれるのである。

べく、同日午前十時、反帝学評を先頭とする部隊二千名は、ただちに中大に結集し、東大へ支援のデモを敢行した。これに対し、機動隊二千名が阻止線を張ったが、我々は、投石、火炎ビンによる徹底闘いの中で、官憲を完全に粉砕し、治安当局は、五時半〝攻撃〟を中止せざるをえなくなる所にまで追いつめ、当局官憲の封鎖解除＝スト収拾策動〟を圧倒的に粉砕したのである。

同時に、機動隊導入をもって、この東大闘争の最終的圧殺を粉砕するべ